

聞き書き

日本時代の朝鮮人警察官の回想

柴 公也 (熊本学園大学外国語学部教授)

日本統治時代の朝鮮の警察に関しては、日本人だけではなく朝鮮人も多数警官として勤務し、日本の朝鮮統治に協力していたということは周知の通りである。ただ、日本人の警察官の手記などは多数残されているが、朝鮮人の警察官の手記などはほとんど残されていない。これは、独立後の韓国において日本の警察官であったということは、対日協力者であり、すなわち売国奴である「親日派」を意味したからである。そのため、当時の朝鮮人たちがどのような思いで日本の警察官を志願し、どのように勤務していたのかということに関しては、未だに不明のままと言わざるを得ないだろう。

それで、筆者が2010年5月に、ソウルの漢陽大学校で開催された「咸鏡北道道民運動会」で知り合った1915年生まれのK. M氏が日本時代に警察官として勤務していたということを聞き、その後2015年頃まで、年に二、三回K. M氏の自宅で警察官時代の思い出話を伺っている。K. M氏は90代の半ばを過ぎていたが、若い頃柔道で鍛えていたせいか、実にかくしゃくとしていて頭脳も明晰であった。一回、二、三時間、場合によっては酒食を共にして四、五時間も思い出話を聞かせていただいている。

以下のK. M氏の回想記は、それらを筆者がまとめた当時の朝鮮人の警察官の思いを如実に知らせてくれる貴重なライフ・ヒストリーであるが、何せ70年以上も前のことであるから、数字や年代で幾らかの記憶違いや錯誤があるのは避けられないだろう。ただ、支那人の業者からの賄賂の受取などの話に見られるように、大筋において、K. M氏が当時の胸の内を飾らずに率直に語ってくれたものと確信している。もちろん、この回想記だけを以てして、当時の朝鮮人の警察官が皆K. M氏と同じような思いで勤務していたとは言えないであろう。ただ、当時の大半の朝鮮人の警察官が善良な帝国の臣民として、家族や日本のためにと将来の昇進の希望を抱いて、日本人の同僚らと日々協力して勤務していたと見て、大きな間違いはないと思われる。

K. M氏 (1915年生) 咸鏡北道警察勤務

私は、羅南近郊の鳳岩洞の富裕な農家の9人きょうだいの四男として生を享けました。父は慶州金氏で母より年上でしたが、学校は出ておらず、書堂に通っただけでした。母は全州李氏の両班の家に生まれています。書堂には通いませんでしたが、ハンゲルの読み書きはできました。きょうだいの中、次兄を除いて普通学校に通いましたが、中等学校に入ったのは、清津の電気学校を出て、後に警官になったすぐ下の弟だけです。家は中農で、大豆、トウモロコシ、ジャガイモ、水稲などを栽培していました。また、家屋は部屋が十二もある大きな瓦葺の造りでした。

当時の鳳岩洞には百八十世帯ほどが住んでいて、電気は通っていましたが、水道はな

く井戸水を使っておりました。燃料は、石炭ではなく薪を焚いていました。道路は砂利道で、バスの便はありませんでした。大人たちは、男女を問わず、たいい韓服を着ておりました。ムードンはいましたが、私の母は通ったことはありません。母は仏教徒で、海辺の寺に通っていたのです。

数えの9歳で、家から歩いて30分ほどの私立の朝鮮人の学校である水北学校に試験なしで入学しました。校舎は瓦葺の二階建てで、講堂もありました。先生は校長を始め、全員朝鮮人です。私の担任は羅南の師範学校（*二年制）を出た男の先生でした。

三年生頃までは韓服にゴム靴でしたが、四年生頃からは学生帽を被り、灰色の学生服に運動靴を履いていました。カバンではなく、風呂敷に教科書を包んで通っておりました。弁当は、粟の混ざった米飯に、キムチもない唐辛子味噌を詰めただけの粗末なものでした。

水北学校は、一学年80~100名でした。上級生は生徒が少なかったのですが、私の入学した時は、100人を越えております。一つの教室に100人以上が入っていて、それを一人の先生が教えていたのです。女の子は、私の学年にはいませんでしたが、下の学年には二人おりました。同じ部落の中農の娘たちでしたが、当時は、女には教育は不要という考えだったのです。

日本語は一年から習いました。地理や歴史も日本語で習いましたが、朝鮮の地理や歴史は習わなかったように思います。私は運動が得意で、朝鮮相撲、鉄棒、マラソンなどはクラスで断然の一番でした。

学校では、朝鮮語も教えていましたから、休み時間には朝鮮語を使っていました。名前も、日本語の漢字音ではなく朝鮮語の漢字音で呼ばれておりました。日本語が話せるようになったのは、水北学校の二年頃から羅南の第19師団の将校の奥さんたちを相手に、卵や松茸の行商を始めてからです。

ただ、漢字は書堂で習っていたので先生に認められ、三年の時、六年生の卒業式の際に式場の横に私が筆で書いた「藝」という字が掲げられたこともありました。

学校では宮城遙拝をした覚えはありませんし、神社参拝もしていません。また、天長節の教育勅語の奉読もなかったように思います。校長先生は日本語が出来なかったようで、訓話は朝鮮語でした。当時は、面長（*村長）でも日本語のよく出来ない人が多かったのです。校長は公立の普通学校は出ていなかったように思いますが、息子は鏡城の高等普通学校（*朝鮮人の学校だが、内地人の中学校にあたる。後に中学校と改称）に入っています。

私は、水北学校の三年生まで、毎年冬休みと夏休みのそれぞれ一カ月間、遊ばずに書堂に通って漢字を習っておりました。私の村には二つの書堂がありましたが、もう一つの書堂は幼稚園みたいなもので、よく子供たちが外で遊んでいました。

私の通った書堂は厳しい方で、峠を一つ越えた隣の部落にありました。朝九時頃から昼の四時頃まででしたが、特に休みの時間というのはありませんでした。井戸の水を飲むとか便所に行く時は別でしたが、外にも出られませんでした。弁当は持っていきましたが、粟飯に唐辛子味噌の粗末なものです。

書堂の先生は訓長と言っておりましたが、六十代の髭を伸ばした人で、白髪の鬚を結ってマンガンという網目の帽子を被り、韓服を着ていました。訓長は頑固一徹の人で、いつ

たん駄目と言ったら、最後まで絶対駄目だと押し通す信念の人でした。それでも、近くで祭祀などがあると、訓長にも餅などが届けられましたが、その餅を生徒たちにも分け与えてくれるという優しい一面もありました。

月謝は現金ではなく、穀物や餅、鶏などを持っていきました。生徒は20~30人でしたが、女の子も2~3人おりました。年齢はまちまちで、5歳頃から15歳頃までの子供たちが通っておりました。

部屋は十畳ぐらいのが二間ありましたが、民家のオンドル部屋でした。細長い机はありましたが、椅子はありませんでした。正面の訓長と向き合う形で、机を前から後ろに並べ、小さい者が前に、大きい者が後ろに、背の順に床に直にあぐらをかいて座っておりました。

教科書は『千字文』でしたが、硯は重いので書堂に置いていました。鉛筆、筆、墨、ザラ紙を綴じた帳面、それに『千字文』を風呂敷に包んで、男の子は斜めに肩に掛け、女の子は腰に巻いて通っていたのです。当時は、紙は貴重品だったので、漢字の練習をする場合には紙ではなく、枠の付いた四角い箱に砂を入れ、その上に指や鉛筆で漢字を書いて練習しておりました。

書堂では、『千字文』を習うグループと、『千字文』で習った漢字を使って、詩や文章を作るグループに分かれていました。私は『千字文』を終えていたので、詩文を作るグループでしたが、時々訓長が見回りに来て直してくれました。

書堂に通っていた子供たちは、たいいてい学校にも通っておりました。男女同じ部屋ですが、女の子は女の子同士で並んで座っていました。弁当を食べる時は一緒に食べたりもしましたが、中には私に好意を寄せていた女の子がいて、そっと私の御飯の上におかずを置いてくれたりしました。

六年生に上がる時に、龍城面にある私立の朝鮮人の学校である康徳学院が公立の学校に昇格するというので、先生に勧められて康徳学院に転校しましたが、実際には公立には昇格せず、私立のままでした。康徳学院までは峠を三つ越えて行くのですが、歩いて一時間半ぐらいかかりました。校舎は木造の平屋で、講堂などはありません。康徳学院も、先生は校長を始め全員朝鮮人でした。ただ、水北学校とは違って、校長は日本語が出来ました。一クラス38人でしたが、そのうち女は3人だけでした。

康徳学院の卒業式の際には、警察署長や憲兵隊長を招待しておりました。私は、皆勤賞と優等賞をいただき、代表として日本語で答辞を読みました。

普通学校を卒業してからは一年ほど家で農作業の手伝いをし、暇を見ては卵や松茸を羅南の第19師団の将校の奥さんたち相手に行商しておりました。

その後、羅南の従兄の紹介で、羅南橋の近くの山本製菓で菓子造りに従事することになりました。家から自転車で通っていましたが、月給は安くて10円くらいだったと思います。職人は八名で、朝鮮人は私一人でした。山本製菓では、主に偕行社（*陸軍将校の親睦を目的とする団体）に納めるケーキやカステラ、それとチョコレートなどを造っておりました。

当時の羅南は、既にインフラが整備されて、電気や水道はもちろん、ボンベに入ったガスも使っていました。市街地は、主な通りはアスファルトで舗装されていましたが、横丁は砂利道でした。

二年後に、金沢の薬学専門学校を出て道立病院の薬剤師として勤務していましたが、独立して薬局を開いていた説田さんに誘われ、薬の営業に従事することになりました。月給は15円でした。説田薬局には、私と同年の羅南高女を出た色白の美人の娘と、羅南中学に通う息子がいました。

私は薬局の裏手の小さなオンドルの部屋で、家族とは別に食事をしていましたが、たいへん冷や飯でした。それでも、身の程をわきまえて、私を雇ってくれたことに対しては感謝しておりました。薬局には五人ほどの朝鮮人の若者が働いていましたが、私は他の店員と同様に「正吉(せいきち)」という日本名で呼ばれて、番頭役を務めていました。

当時は掛売りが普通でしたから、私は、毎月の月末に集金に行っておりました。実は、最初の時、奥さんにテストされたことがあります。それは、集金に行く前にお釣りを渡されたのですが、その際、奥さんが何銭かを余計に入れておいたのです。帰って来てから精算すると、何回数えても何銭か余るのです。すると、奥さんが「あなたは疲れているでしょうから、もう寝なさい」と言ってくれたのですが、それからは信頼されて集金を全部任されるようになりました。

また、海軍大将の山本五十六が羅南にいた頃、私は薬局の仕事で何度もその官舎に使用に行ったことがあります。ただ、奥さんに会ったことはありますが、本人に会ったことはありません。

21歳の時、営業で知り合いになった東京帝大出の赤田警部の奥さんに人柄を見込まれ、警官への道を勧められました。なんでも、警官になると待遇が良く、五年間働くと恩給が付くと言うので、説田さんには内緒で試験を受けることにしました。すると、運良く合格したので、最初に奥さんに事情を話して諒解を請うたのですが、奥さんは許可なく受験したと言って、ぶりぶり怒っておりました。

一方、説田さんは大人らしく、「陛下の警官として御国のために尽くしたい」と許しを請うと、「漁大津に薬局の支店を出して、お前に任せるつもりだったが、お前が御国のために尽くしたいと言うのなら、警官になって立派に勤めろ」と言って、励ましてくれました。

半年間の警官の講習を終えて任官した後、挨拶に行ったら、なんと反対していた奥さんが最敬礼で迎えてくれました。説田さんは、「御国のために尽くせ」と、饞別として40円もする金時計を贈ってくれたのです。

警官の応募条件は、普通学校以上卒の満20歳以上の朝鮮人の男子ということでした。35名の募集に、朝鮮全土から300人以上が応募してきました。

試験として、一般常識の他にマラソンがありました。一般常識は、「鬼に金棒」や「横車を押す」の意味を問うような簡単なものです。マラソンは、羅南から水北橋までの12キロを往復するというものでした。私は子供の頃から走るのが好きでしたから、二位に圧倒的な差をつけて一位になりました。トップでゴールインすると、教習所の教官の蟻川さんが私を見て、満足そうに微笑んでおりました。私のことは、既に赤田さんから聞いていたのでしょう。蟻川さんは本の虫で、どこに行く時でも必ず本を携えておりました。なんでも、咸鏡北道の警部の昇任試験に首席で合格したのだそうです。

咸鏡北道からは、5人が合格しました。また、普通学校を出ただけの者は7名合格しましたが、私が一番でした。合格者の中には中学校や師範学校を出た者もいましたし、30

歳を越えていた人も何人かおりました。

私が試験に合格した時、故郷の両親は口に出しては言いませんでしたが、内心では喜んでいただのではないかと思います。また、部落の人たちが郷里の名誉とばかりに河原で祝宴を開いてくれて、私の父や駐在所の巡査を招待し、牛を二、三頭屠って祝ってくれました。

半年ほど、羅南の咸鏡北道の道庁の教習所で講習を受けましたが、その間の月給は18円でした。風呂に入る時と日曜日に外出する時以外は、三人一組で10畳ぐらいの民家の一室に泊まり込んで、講習を受けておりました。主に憲法、刑法、刑事訴訟法などを中心に習いましたが、試験もありましたので、必死に勉強していました。食事は、朝鮮人の小母さんが作ってくれましたし、風呂は近くの銭湯に通っておりました。ただ、洗濯は自分でしていました。

説田薬局に勤めていた二十歳の時に、鏡城出身の両班の叔母さんから、鏡城の面長を務めていた叔母さんの兄の孫娘を紹介されました。何でも私より一つ下で、鏡城の普通学校を出て鏡城の女子のための農業講習所に入り、修了後農業指導員を務めていたそうです。

それで、叔母さんと一緒に相手の家を訪問することにしました。写真も見えていませんでしたが、信頼できる叔母さんの話でしたので、会う前から結婚するつもりでおりました。両班の娘は家庭の教育がしっかりしていて、貞淑で夫の両親に良く仕えるので間違いないと思ったのです。

紺の背広にネクタイを締めて、叔母さんとともに相手の家に行ったのですが、最初は両親の待つ客間に通されました。しばらく話をしていると、開け放した窓の向こうを白い韓服にお下げ髪の若い娘が通り過ぎて行きました。直感的に「ああ、この女性か」と思ったのですが、その後、叔母さんに連れられて別の部屋に案内されました。行ってみると、案の定、さっきの女性が立ってうつむいたまま私を迎えてくれました。私たちは、挨拶して向かい合って座りました。互いに自己紹介をして、二言、三言話を交わした後、再び叔母さんと一緒に客間に戻りました。そこで、どうかと聞かれましたが、別に不満はなかったので「結構です。お受けします」と答え、その女性と結婚することになりました。

婚約が決まってから妻の家を二度ほど訪ねましたが、その際、服の生地と腕時計をプレゼントしました。ただ、二人きりで会ったことはなく、いつも叔母さんと一緒でした。当時の田舎では、見合いもせず写真も見ずに結婚式の時に初めて顔を合わせるというような、親の言うままに結婚するのが普通でしたので、私たちのように一応見合いをしてから結婚するというのは、新しい結婚のスタイルだったのです。

結婚は、警察の講習が終わってから茂山に赴任するまでに一週間の休暇がありましたから、私の郷里の鳳岩洞の実家で、親戚や部落の人たちを招き、朝鮮の伝統に従って行いました。妻は、チマ・チョゴリでしたが、私は洋装でした。当時は、新婚旅行などはなく、直ぐ妻を連れて汽車に乗り、任地の茂山に向かったのです。

茂山の家は官舎ではなく、オンドルの部屋が一つと台所の付いている民家をチョンセ（*毎月家賃を払うのではなく、最初にまとまった多額の金を家主に預け、家主はそれを運用してその利子を家賃に当てるというシステム）で借りました。茂山は郡庁の所在地でしたので、電気と水道は既に通っておりました。燃料は薪でした。中心街は舗装されてバ

スの便もあり、小型のバスが走っていました。

トイレは外の共同トイレでしたが、風呂は警察署にありましてし、妻は近くの銭湯に通っておりました。また、警察署から100メートルほど下った所に市場があって、野菜や魚、肉などの食料品は何でも揃いました。

子供は四年目に授かりましたが、その間、家では若い女性に家事を任せていましたから、妻は食事の用意以外は別にすることがありませんでした。それで、退屈しのぎに、昔取った杵柄で家の側の空き地を家庭菜園にして、近所の奥さんたちと野菜作りをしておりました。家にはラジオがありましたし、仕事の必要上、日本語の新聞も購読していました。妻とは、お互いに「ヨボ（*ちょっと）」と呼び合っておりました。

昭和12年の秋に、警部の赤田さんが南京に駐在することになり、後で赤田さんの妹と一緒に奥さんを私服で南京まで案内して行ったことがあります。南京攻略の前でしたが、街は落ち着いていて別段変わった様子はなく、ホテルの支那人たちからも何の敵意も感じられませんでした。

翌年の秋には、総督府の指令を受け、ソ連に逃亡したスパイを働いていた朝鮮人の捜査という名目で、内地人の同僚と一緒にシベリア鉄道に乗って、はるばるソ連のレニングラードまで内情の探索に出掛けたことがあります。

また、同様な使命を帯びて、ウラジオストクやハバロフスク、それと満洲里やハルビン、吉林なども回ったことがあります。さらには、朝鮮人の憲兵補と一緒に北海道や樺太にも渡って、当時炭鉱などで働いていた朝鮮人の動向を調査したこともありました。中には、共産党員や独立運動に関わっている者もいたのです。

茂山の警察署では、本給は28円でした。国境手当もありましたが、いくらかは忘れてしまいました。また、他にも手当てが付いていたと思います。内地人の同僚には、6割の加俸がりましたが、私は警部補として年長の内地人を指導する立場にいましたので、加俸がなくても別に不満はありませんでした。

茂山は鉄鉱山の街で、労働者が10万人以上住んでいました。内地人も、管理職や技術者として多数内地から派遣されておりました。内地人の学校は小さなものはあったかもしれませんが、ほとんどは羅南に集まっておりました。

茂山では司法刑事でしたが、私服で茂山の町を巡回しておりました。茂山は豆満江を挟んで対岸が満洲だったので、支那人も多く、食堂や洋服屋を営んだり、郊外で野菜を栽培したりしていました。ただし、保安上の問題から鉱山労働者として働くことは許可しておりません。茂山の製材所の所長は朝鮮人でしたが、大金持ちでした。

私は郷里の人たちに頼まれて、30人ぐらいの若者を茂山鉄山に就職させています。鉄山の労務課長と、私は昵懇の間柄だったのです。

茂山には遊郭もありましたが、内地人の遊郭と朝鮮人の遊郭に分かれておりました。内地人の遊郭の「梅月」は内地人専用でしたが、朝鮮人の遊郭の「春満楼」は安いので、内地人も遊びに来ておりました。

当時は物価が安かったし、必要なものは下着まで支給されましたから、生活は楽で半分ぐらいは郵便貯金に入れておりました。私は酒も飲まないし、煙草も吸わずに真面目に働き、また役得もあったので、五年間で千円以上も貯金が出来ました。それで、三年目に300円で部屋が三つある瓦葺きの家を買いました。

その家には、野菜などを貯蔵する地下室がありましたが、そこを自分用の書斎に改造して、毎晩、昇任試験の勉強に励んでおりました。その家は羅南に転勤になった際に380円で売れましたから、80円まるまる儲かったという訳です。ちなみに羅南での給料は48円でしたが、さらに恩給が7円付きました。

茂山は満洲との国境地帯ですから、匪賊が出没して家畜などを略奪していきました。私は原生林を一日に40キロも踏破して匪賊を討伐し、また、張鼓峰事件（*1938年7月29日から8月11日にかけて、満洲国東南端の張鼓峰で発生したソ連との国境をめぐる武力紛争）にも一ヶ月程出動して、内地人の警官を上回る抜群の功績を挙げたので、道庁で道知事から勳七等の勲章を授与されました。

お寺で正月の参詣があった時などには、若造でしたが胸に勳七等の勲章を付けて、署長を差し置いて上座に座っておりました。勲章を授与された人は、そのような機会には得意満面だったのです。

当時、朝鮮人には兵役がありませんでした。しかし、私は陛下の警官として、兵隊に劣らず御国のために尽くしているという自負がありましたので、その点で内地人に負い目を感じるといようなことは全くありませんでした。

茂山警察署に勤めて四年目に警部補に昇任しました。茂山では五年半ほど勤務しましたが、国境警備隊ではなく、保安課に属して私服の刑事を務めておりました。また、柔道の選手もしていましたが、柔道は普通学校の三年生から始めておりました。ただ、本格的に始めたのは警察に入ってからで、それまでは朝鮮相撲などもしていましたが、柔道は二段にまで昇段しています。

一年に一回、咸鏡北道の警察署長の会合がありましたが、その際柔道の大会が開かれていました。